

# アレクサンドロスと佛教

——ラモート教授の最近の研究について——

佐々木 教悟

ベルギーのルーヴン大學ラモート (Erienne Lamoire) 教授は、故ドゥ・ラ・ブレー・プーサン教授の高弟であり、その學風についても、プーサン教授の諸業績に見られるやうな、漢譯の佛典を巴利語・梵語・西藏語などの諸本と共に併用して、佛教哲學の根本的なテキストを正確に讀解しようとする研究方法を承け繼いでゐる眞摯な學者である。このやうな研究法に基いて、既に解深密經<sup>①</sup>、大乘成業論<sup>②</sup>、攝大乘論等<sup>③</sup>の研究を行ひ、夫々のフランス譯を公にせられたことは周知の如くである。近年は龍樹の大智度論百卷の研究に従事し、その内の第十八卷末迄に相當するフランス譯を刊行せられた<sup>④</sup>。これらの著作を一瞥しても明かなやうに、夫々の言語、事實及び思想に對して出来る限り、その所在を數多くの文獻中に尋ね求め、嚴密な考證をなし、夫々の言語、事實及び思

想を最も具體的に、また客觀的に把握せしめようとして居られるのに氣が付くのである。佛教の經典並びに論書を読んで了解するためには、かやうな仕方がいかに要請せられてあるか、また佛教學の研究と云つても、佛教の聖典がそのやうな方法で正確に讀まれてこそ遂行せられるものであることは、今更論ずる迄もない。教授のこれらの研究業績を見れば、印度の佛教については勿論、シナ及びチベットの佛教についても造詣が深く、その該博な、しかも正鵠な知識には驚くの他はない。また特に、印度に於ける初期大乘佛教の歴史的背景として考へられる諸點についても一眼鏡を有して居られることは、昨年刊行の山口博士の著「世親の成業論」に寄せられた教授の序文を見ても、その片鱗を窺ふことができる<sup>⑤</sup>。今、こゝに紹介しようと思ふ教授の研究は、その方面につなが

るもので、ハノイの遠東學院年報第四十四號所載「アレクサンドロスと佛教 Alexandre et Le Bouddhisme」(BEFEO, XL, IV, 1951)と題する論文である。

この研究は、凡そ次の三部門より成つてゐる。

(一) 印度に於けるアレクサンドロスに對する記憶

(二) 根本説一切有部毘奈耶に於けるアーティラージェヤとブハドドラアシナ

(三) 摩訶三摩多とアレクサンドロス

註① Saṅghinimocanaśūtra, 1935.

② Le traité de l'acte de Yasubandhu, Karmasiddhi-

prakaraṇa Mélanges chinois et bouddhiques IV, 1936.

③ Le somme du grand véhicule d'Asaṅga, 4 vols., 1938.

④ Le traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna. 2 vols., 1944, 1949. 第一冊は卷十、第二冊は卷十八末途に相當する。

⑤ 山口益著「世親の成業論」卷末に、一〇頁に及ぶ Pré-face の原文が掲載されており、その摘要が「はしがき」に述べられてある。大菩薩は一般の人間の枠から出て、歴史の外に行動するものとなして、彌勒菩薩の演ずる役割を敍べてある點、傳説の古跡性を重んじて大乘經典出現に纏はる諸種の傳説に對して合理的な解釋を與へようとする點などを指す。この研究に依用せられてゐる

根本説一切有部毘奈耶の中に出てくる傳説の古跡性を問題とされるのは、かやうな立場に基くものである。

⑥ Alexander, Alexandre, 亞歷山、歷山等諸種の書きあらはし方があるが、今は「京大東洋史」その他最近の書物が一定して用ひるギリシア語のアレクサンドロス (Alexandros) を採用する。尙、この論文の載つてゐる年報は、學院の五十周年紀年號で、特にフーシェ博士に捧げられてゐるものである。

(一) 印度に於けるアレクサンドロスに對する記憶

アレクサンドロスとは、かの有名なマケドニアの王のことで、マケドニアをギリシア諸邦の首位に高めるために努力し、エレーネ民族統一の理想を實現したところの、世界史上注目されてゐる人である。王は東方ペルシアを支配すると共に、紀元前三二七年から三二五年にかけて印度の西北地方に遠征し、パンジアーブ地方に足跡を印した。短期間ではあつたが、アフガン群山の征服、インダスの横斷、タキシラ入城、ポロスに對する勝利、ヒパズ迄の壓迫、インダスの下降、ムシカノス、オクシカノス、サムボスなどの諸王に對して行つた報復<sup>①</sup>、インダスのデルタ地帯探檢等、王の印度に於ける足跡は、

多くの輝かしいものを残してゐる。ところが、かやうな大王の印度遠征に關して、印度人は何らの記録を残さず、全く沈黙を守つてゐる。吾々が大王に關する一つの記述を發見するためには、遙か後の第七世紀の宮廷詩人バーナ(Bāna)の出現迄待たなくてはならないのである。また、大王撤退後のパンジヤール地方居住のバクトリア人を支配したインド・ギリシア諸王に關しても、僅かに、シユンガ王朝のプシャミトラに對する勝利者であるデメトリウス<sup>④</sup>、那先比丘と問答して佛教に歸依したと云はれてゐるメナンドロス<sup>⑤</sup>、ヴィシュヌの一派であるバーガヴタの徒と自ら稱したアンティアルキダスの名が現はれてゐる位で、印度人の沈黙は古代の最後の二世紀の間尙も續くのである。ラモート教授は、先づこの問題を探り上げて、印度人はこれらの外國諸王の替りに神話上の人物を置くことに躊躇しないこと<sup>⑦</sup>、そしてアレクサンドロス大王は、かやうな置き換えの最初の犠牲者であるとなし、その間の事情を考古學上の遺物と文獻學上の検討とから明かにしようとして試みるのである。

前述の如く、大王の遠征に關して、印度側は沈黙を守り、何らの資料も與へないが、ギリシア及びラテンの資料が比較的確實な記録を残してゐる。それらの記録によ

れば、大王がヒダス・ペヘー(Hydaspes、現今の Jhelum)河の兩岸にニカイア(Nikaia)とブウーケーバラ(Boukephala)と云う二つの都市を建設し、更にヒパーズ(Hyphase, Bias)河の附近に祖先を祀るために十二個の祭壇を築造したことが知られる。そこで、ラモート教授は、二つの都市の造られたジエーラムと云う土地の地理的位置をブトレエミーの地理書、メガステネスの斷片等によつて詳細且つ嚴密に考證する。即ち、バクトリアから出發して trans-iranien の線上を東へと延びるルートはタキシラ(Taxila)へと向つてゐるのであり、更にそれは分岐してマトゥラー(Mathoura)まで延びる。タキシラからマトゥラーへ赴く旅人は、順次 Maudra, Jhelum, Lala Musa, Gujrat, Gujranwale, Muridke の宿場と共に Lahore と Rawal Pindi を結ぶ所謂 trunk road を歩むのであるが、教授は佛教に屬する古い旅行記の中に、このジエーラムの地に於ける二つの都市がアーディラージュヤ(Adirajya)とブ・ンドラアシユヴァ(Bhadraçva)と云ふ名で表はされてゐることを見出し、そのことの究明に力を注ぐのである。また、十二個の祭壇に關しては、プルタルコス<sup>⑧</sup>の記述に基いて、大王がいかなる意圖のもとに築造したかを検討してゐる。

註① Mousikanos, Oxykanos, Sambos なる名で呼ばれて

ゐるこれらの三人の土人王は、インダスの支流が合して一つの流れとなる地點より南の地方に住した王で、南下するアネクサンドロスの軍勢に頑強な抵抗をなした。この反抗は婆羅門族の國民的自覺によつて煽られたが結局敗北したと云はれる(金倉圓照著「印度中世精神史」下、一七六頁)。サトハメの大王に對する背信に關しては L'Inde civilisatrice aperçu historique par Sylvain Lévi, p. 67 以下を参照せよ。

② Briha 及 Harpa (636—648) 王に仕つた詩人。彼の作品「ソルシヤ王行傳」の中に「古代の英雄の偉大な功績と近代の王の怯懦とを對照して諷刺的に歌じてゐるところがあるが、その大王を登場せしめてゐる。Harṣa-rita, VII, p. 214 (ed. Parab, Bombay, 1950)。

③ 彼が破佛の行ひをなしたことをいふのは、北京版チヤント語 Vinaya-uttaragrantha (Īḍul-ba gshun bla-ma) の奥書にもその記述がある。谷大目録 No. 1036. cf. Lévi, *ibid.* p. 65.

④ 彼はインドラ (Rex Indrum) の稱號を獲たと云はれてゐる。Lévi, *ibid.* p. 65.

⑤ 那先比丘 (Nāgasena Bhikkhu) との間答の内容は Miṅḍapāṇā (漢譯「那先比丘經」大正三十二所收) 譯者不詳二卷本と三卷本とあり) として現存する。Lévi, *ibid.* p. 68—72. 中村元著「インド的思想」昭和二十五年刊、參照。

⑥ 彼は Antialkidas Niképoros 王或は Antialkita Jayadhara 大王と稱せられたる。Lévi, *ibid.* p. 75.

⑦ イラノの歴史家 Albrinouni の證言を基へ。

⑧ Putarque: Vita Alex. (éd. Ziegler), Fl. philost.: Vita Apollonii (éd. Kayser), F. Altheim: Weltgeschichte Asiens im griechischen Zeitalter, Corpus Inscriptionum Indicarum, Quinte-Curce (tr. H. Bar-don), Arrien: Anab, Megasthenes: Ta Indika (éd. E. A. Schwanbeck) etc.

cf. U. Wilcken: Die letzten pläne Alexanders des Grossen, in SBAW, XXIV, 1937, H. Berve: Die Verschmelzungspolitik Alexanders des Grossen, Klio, XXXI, 1938, W. W. Tarn, Alexander the Great, Cambridge, 1948.

⑨ Nikaia の建設に關しては L'Inde Classique par Louis Renou et Jean Filliozat, 1947, p. 205, 207 參照。

⑩ putarque: Vita Alex., LXII, 8. 尙「プルトルクは西紀四六一—二〇〇の人であるが、祭壇は略々その時代迄殘つてゐたと云はれる。プルトルクについては「文庫クセシユ」『ギリシヤ文學史』一三五頁、參照。

(二) 根本說一切有部毘奈耶に於ける

アーティラージュヤトブントラ

アシユヴァ

それでは、かの佛教の旅行記とは、いかなる類のものであらうか。佛陀は西曆紀元前四七八年に四十五年間の説法を終つて涅槃に入り給うたのであるが、その入滅少し前に、印度の西北地方に教化の旅をせられたと云うのであり、その旅の道中記とも稱すべき性質のものである。けれども、學者の指摘する通り、佛陀生存中の教化範圍は、ガンジス河の中流及び下流地方に限られてゐて、佛陀の赴かれた最も西の端でも、ヴェーランジャー (Varanji) 附近迄と考へられる。これは一体どうしたことであらうか。教授は之に對して次のやうに考察する。即ち、阿育王の治世 (前二六四—二二六) に末田底迦 (Madhyantika) 阿頼漢並びにその伴隨者がカシュミール・ガンダラ地方に開教し、その結果、佛教が初めて西北地方に弘通した。そして彼はその地方の佛教徒から佛陀の化身として信ぜられ尊崇せられた。そのために、彼の前生に於て、未來の佛陀に依つて成し遂げられる主な功績を其處に現はし出すと考へられた。そのやうな理由から、佛陀の入滅前に、所謂西北印度に於て行はれた佛陀の旅のあらゆる部分が假作せられることになつたと云ふのである。この旅行に關する資料としては、雜阿含、*Divyāvadāna*、阿育王傳、阿育王經、智度論、西紀三九

九、五二〇、六三〇年頃に夫々この地方を旅行した法顯、宋雲、玄奘の傳聞、十一世紀中頃のカシュミールの詩人 Ksemendra の *Avadānakalpalata* 等があり、ガンダラの藝術家達は、その作品である浮彫の上に、若干之に關するエピソードを表現してゐる。中でも、最も詳細に傳へるものは、根本説一切有部毘奈耶藥事の中に見出される。ところで、從來は之に關して西藏大藏經甘露爾に收められてゐるチベット譯と義淨の譯した漢譯しか吾々はもたなかつた。それにも拘らずピジルスキー (M. J. Przyluski) 氏は、土地の名をサンスクリットに還元することに努力し、極めて有益な研究を行つた。しかるに、一九三一年にカシュミールの西北境ギルギット (Gigit) に於て、その梵文寫本が発見せられ、最近、周到な配慮のもとにカルカッタ大學ダット (Nalinaksha Dutt) 教授及びその助力者に依つて出版せられた。 (*Vinaya Pitaka of the Mulasarvāstivādiṅs of Kashmir. Ed. by N. Dutt and Sh. Shastri. 4 vols. Calcutta, 1950.*) この出版によつて吾々は非常な便宜を得ることとなつたが、ラモート教授は逸早くこの梵本を依用するのである。根本説一切有部毘奈耶構成の正確な年代は明かでなく、後世に於て増廣せられたことは事實であらう。

けれども、その中に記されてゐる所謂佛陀の旅の出発點は確信的に定めることができる。即ち、それはカニシヤカ王の治世である。その理由は、王によつてペシヤール(Peshwar)の附近に建てられた記念の塔に關する一つの豫言<sup>(1)</sup>を含んでゐると、シヤール・ジー・キー・デヒーリー(Shah-jiki Dheri)の塚に於て發見された考古品の調査の結果<sup>(2)</sup>に由るのである。故に、佛陀の旅行と稱せられるものは、王の統治よりも前ではあり得ないとする。そして、教授は王の卽位をギルシヤマン(R. Ghirshman)氏の説に従つて西紀一四三一—一五二年の間に置してゐる。

さて、ラモート教授は毘奈耶藥事の中に出てくる所謂佛陀の旅行を、次の三つのコースに區分し、各コースに於ける通過都城の名に對して、梵藏漢三本を照合し、夫々の地名及び位置について嚴密な考證をなしてゐる。

(一)ハステイナブラ(Hastinapura 象城<sup>(3)</sup>)からローヒタカ(Rohitaka 盧醯咀迦<sup>(4)</sup>)へ

(二)ローヒタカから西北地方へ(ローヒタカへの歸還を含む)

(三)ローヒタカからマトゥラー(Mathura 摩偷羅)へ  
この旅の同伴者としては、(一)と(三)のコースは阿難、(二)

のコースの場合は金剛手が選ばれてゐる。この中、(三)のコースがタキシラー—マトゥラーの所謂傳統的ルートであり、佛陀と阿難とが通過するその行程の中に、前述のジェーラム即ちアレクサンドロス大王の建設したニカイアとブウーケエーパラの兩都市が位置する丁度その地點があるのである。そして、毘奈耶藥事の記述に従へば、これらの兩都城は古王聚落 Adirāya, Dan pōhi rgyal srid 及び賢馬聚落 Bhadrāḡva, Rta bzan と名づけられるものに相當することが知られる。教授はこの二聚落に關する箇處の文を梵・藏・漢(漢文のフランス譯)三譯對照し、文獻學上からマハーサンマタ(Mahāsamma-<sup>(5)</sup> 摩訶三摩多)王が最初に灌頂式を行つた地がアーディラージュヤであり、マハーサンマタ王が乗用のための良馬を得た地がブハドラアシュヴァであること、即ち、テキストは神話の摩訶三摩多王の想出に於て、この二つの聚落の間に親密な關係を設けており、一つは彼の卽位式の證據、他は轉輪聖王<sup>(6)</sup>の七寶の一つである彼の優秀な馬の出現してくる證據を示してゐることに注意するのである。次に地理學上の見地より紀元前三二七年にアレクサンドロス大王によつてジェーラム河岸に建設されたところの、西岸のニカイア、東岸のブウーケエーパラを確

認する。そして、「アレクサンドロスは、印度人に對する彼の勝利（ボロス王に對する勝利を意味する）を記念するために、一つをニカイア（Nike—Nikaia 勝利）と名づけ、この地で死んだ彼の愛馬 Boucéphale を記念して、他をブウケエーパラと名づけた」とするギリシア側の資料に基いて、その間の事情を考察する。更に、考古學上、古錢學上から次のことを引き出す。即ち、發掘された或る鑄造貨幣の表面に王冠を有する女神があり、裏面にマケドニアの騎兵がボロスの象を追撃する圖案のあること。その表面は戦勝のアレクサンドロスを表はし、裏面はボロスに對する勝利がニカイアの地に於て遂行されてゐるから、かのニカイアを表示するものであること。又その地は、その後のインド・ギリシア王の首都ともなつてゐるところから、メナンドロスの貨幣にもニカイアの都城を暗示すると思はれるもの、牛の頭を打ち出してブウケエーパラの都城を暗示すると考へられるものがあることを述べてゐる。

註① フーシェ博士は最近、佛陀の人壽六十五歳（三十年説法）と云ふ新説を出してゐる。その主な理由は、諸種の佛傳はいづれも成道後の或る期間に於て空白時を有してゐる。成道後二十年を過ぎれば過ぎる程、佛陀の生存の

流れは沙原の中の流れのやうに段々細くなつて遂には消えてしまふ。そして涅槃の直前になつて驚く程詳細な記録をもつやうになる。その空白の期間を十五年と見て、この期間は實際には、佛陀は生存しなかつたのである。即ち佛陀の人壽は六十五歳である。そして南方の傳承による紀元前五四三年入滅と云ふのは、實は入滅でなくして誕生の年代である。傳承の間に誤傳せられたのである。入滅はヨーロッパの學者が到達した紀元前四七七年であり、従つて歴史上の佛陀は前五四三—四七七年の生存といふことになると言ふのである。（La vie du Bouddha d'après les textes et les monuments de l'Inde par A. Foucher, 1949, p. 322-323）この説に對しては恐らく諸種の異論があることと思うが、今は唯、新しい見解として紹介するのみにとどめる。ただ、博士の所論の中に、故望月信亨博士の「佛陀成道四十五年間に於ける安居の地點」（佛教研究、一（二））などの論説に對する批判のなされてゐないのが淋しい。A. Barreau 氏は最近 La date du Nirvāṇa (J. A., Tome CCXLI, année, 1953) を發表したが（佛滅年代を前四八〇の附近におく）、櫻部建氏によればフーシェ博士の所論には觸れていないといふことである。

② 赤沼智善「釋尊の四衆に就いて」原始佛教之研究、所收三八三頁、昭和十四年、山田龍城「原始佛教教團の擴がりとその時代的區分」印度學佛教學研究第一卷第二號所載、昭和二十八年。

- ③ この位置については赤沼智善「舍衛城及び祇園精舎の研究」原始佛教之研究所収、四四五頁参照。
- ④ 大唐西域記卷三、大正五十一、No. 2087, 八八三a。
- ⑤ この傳説の風土馴化に關するは、Art gréco-bouddhique par A. Foucher, II, p. 412 に述べてある。
- ⑥ 雜阿含經二二、大正二、No. 99, 一六五a。
- ⑦ Divyavadana XXIX, p. 348.
- ⑧ 阿育王傳卷一、大正五十、No. 2042, 一〇二b。
- ⑨ 阿育王經卷二、大正五十、No. 2043, 一三五b。
- ⑩ 大智度論卷九、大正二十五、No. 1509, 一二六b。  
Traité de la Grande Vertu du Sagesse par E. Lamotte, éd. 1944, I, p. 547.
- ⑪ 法顯傳、大正五十一、No. 2085, 八五八a。
- ⑫ 惠生と共に旅行。惠生に使西域記一巻(大正五十一、八六六下)。宋雲に魏國已西十一國事一巻あり洛陽伽藍記卷五其他に引用。
- ⑬ 支婁、大唐西域記、註④参照。
- ⑭ éd. R. Mitra, II, p. 136-151.
- ⑮ Art gréco-bouddhique I, p. 270-275.
- ⑯ 根本説一切有部毘奈耶藥事卷九、大正二十四、四一、b-c。
- ⑰ 大谷大學北京版西藏大藏經甘珠爾勘同目錄 No. 1030. Hdul-ba gshi (Sman gyi gshi) 第九十四函二〇a 4 — 第九十六函四七b 6、尙、ラモート教授はナルタン版を依用せらる。
- ⑱ 漢譯は二十卷(現存十八卷)より成るが、國譯一切經に於ては、最後の二卷に相當する漢譯に無い箇處を大谷大學所藏北京版のチャット譯から補つてある。
- ⑲ Le Nord-Ouest de l'Inde dans le Vinayades Mūla Sarvastivādins par M. J. Przyluski, JA, nov.-déc., 1914, p. 495-522, この研究にはシルマン・ンヴァ博士の序文がつけてあり、資料の問題とその研究の意義とが述べらる。山田龍城「マトラーの傳えから」佛教學研究八・九號、一六一頁参照。
- ⑳ 國譯一切經律部十九—二十四緒言に於ける西本龍山師の解説、及び佛書解説大辭典第三卷、五三三頁参照。
- ㉑ N. Dutt: Gilgit Manuscripts III, part I, p. 2, Srinagar, 1948.
- ㉒ J. Cumming: Revealing India's Past, London, 1939, p. 139-140; cf. Contribution à l'étude de l'art du Gandhāra par H. Deydier, 1950.
- ㉓ R. Ghirshman: Bégām, Le Caire, 1946, p. 102. (この著者のH. Deydier氏の書評あり) BEFFO, XLV, fasc. 2, 1952) ラモート教授は最近の説としてカニシユカ王の即位を後七八年説とする(エヌヤ女史(J. E. van Lohuizen de Leeuw)のあつたことを註記してある。女史はその著 The "Soythian" period. Leiden, 1949. に於てラブソン氏の七八年説に戻ることを提唱したが、アンリー・デュエイエ氏は、これを批評して全面的に賛同しがたう旨を述べた(La date de Kaniska,



L'Art du Gandhara et La Chronologie du Nord-Ouest de L'Inde réflexions à propos d'une récente théorie. J. A., 1951, p. 133-151)。最近はギレンシマン氏の説よりも少し早い年代とする説が有力の模様である。即ちハイネー教授の採用する一二八—九九年説である。

(D. R. Shackleton Bailey: The Śatapadśāstaka of Mātrceta. with an Introduction. Cambridge, 1951, Intr. p. 7)。尚、カニシユカ王即位年時の諸説に關しては、

靜谷正雄「ギリシヤ・サカ・バルティア・クシヤーナ時代の印度佛教銘文に就いて」佛教學研究第七號四四頁參照。

㉔ Hastinapura (Hastināpura) は Kuruksetra の都として Mahābhārata 物語の舞臺となつてゐる地である。また、ターラナータ印度佛教史第十四章によれば婆沙の四大論師の時代、百八ヶ所の佛寺を建立したと云はれる婆羅門 Viryavana が出たのもこの地である。

㉕ 西域記卷三、慈恩傳卷二によれば、阿育王がこの地に塔を建立してある。盧薩咀迦窣堵波がそれである。ローヒタカとは赤色の意である。この地は Maṅgalapura (Maṅgālor) の都の西約五十里にある。

㉖ このルートに關してはフーシエ博士の研究がある。La vieille route de l'Inde: de Bactres à Taxila; Vol. I, 1942, Vol. II, 1947, Paris. (Vol. I, p. 36-40, 47)

㉗ 印度に於ける轉輪聖王のもじ意味については、中村元「轉輪聖王と呼ばれたカリンガ國王カラーヴェーラ」印度學佛教學研究第二卷第一號所載、昭和二十八年參照。

㉘ 大王の軍に降伏した Poros が寛大な計ひによつて、再び王の地位につくことを許され、Abhisēka (灌頂式)を行つたのもニカイアであるとする。

㉙ cf. L'Inde civilisatrice par Sylvain Lévi, p. 73, 75.

### (三) 摩訶三摩多とアレクサンドロス

アレクサンドロス大王によつて建設されたこの二つの都市が何故に神話の摩訶三摩多王に歸せられることになつたのか、この取り替への事情については次のやうに考察が進められる。

先づ、教授は西北地方の歴史的な變遷に注目する。この地方は西紀初頭にクジュラ・カドフェイス<sup>①</sup>(Kujula Kadphises 丘就卻)によつてクシヤナ王國の領土の一部となる迄にマウルヤ王朝の手に、インド・ギリシア領主の手に、そしてインド・スキタイの手に次々と渡つてゆく。この間に全西北地方は佛教の感化を受け、カシユニールは説一切有部の學派の根據地となり、大衆部 (Mahāsāṅghika) とその分派である説出世部 (Lokottaravādin) とがマトゥラーに、アングラブ (Andarab) に、そしてバーシヤーン (Bāmyān) に迄も固く根をおろし、正量部 (Sāṃmatīya) はシンド (Sind) に位置を占めた。

そのやうな情況の中で、大乘は發展の最中にあり、凡ゆる派のバルチザンに算へられた。そして、特にカピイシ  
ー (Kapisa 迦畢試) やウッディヤーナ (Uddyāna 烏  
仗那) に迎へられたが、逐次、本生 (Jataka) や譬喩  
(Avadāna) の文學を介して民衆の間に浸透していつた。  
さう云ふ前例のない成功が佛傳を著しく増大せしめるこ  
ととなつた。西北の各主要都市は宗教古俗學に於て描寫  
されるやうになり、未來佛の功績、釋迦牟尼の訪問或は  
大弟子の出現等々のことによつて、嘗つて名を顯はした  
地であることを願ひ、且つ又そのやうに信ずるに至つ  
た。かくの如く考へることによつて、教授は異國人の王  
によつて建設されたニカイアとブウケーエーパラの都市  
は、その地方の佛教徒達によつて彼等の主權者である神  
話の摩訶三摩多王に付與せられ、轉輪聖王がこの地で灌  
頂を受け、良馬を惠與せられたことがあつたと言ふ話柄  
のもとに、アーディラージュヤ (最初の王の都) とブハ  
ドラアシユヴァ (優秀な馬の都) なる名を招來するに至  
つたものとなすのである。

次に、教授は摩訶三摩多王の、その Mahāsammata  
と言ふ言葉のもつ意味を検討する。即ち、先づこの王が  
釋迦族の最初の祖先とせられてゐるところから、各佛教

學派の傳へる釋迦の系譜について述べる。そして、  
「大なる和合」<sup>①</sup> 大なる同意<sup>②</sup> を意味する Mahāsammata  
の義を闡明にする。それを要約すれば、大略次の如くな  
るであらう。摩訶三摩多は、此の世界に於て所有權の問  
題に關して最初の争ひが發生した時、大衆の共通の合意  
によつて、選ばれて王と名づけられた。そして、全耕地  
に於ける稻の配分に關する權利を有してゐたから刹帝利  
(Kṣatriya) と名づけられた。また、この王は部下を正當  
に保護することを任務として灌頂を受けた王であるとい  
うことになる。要するに民衆によつて選ばれ、民衆の福  
祉のために責任を負うてゐるのが、この王である。ここ  
に於て、ラモート教授はアレクサンドロス大王のヒュー  
マニズムをとりあげる。多くの史家は大王のヒューマニ  
ズムについて疑問をもつてゐるが、彼こそギリシア人或  
は野蠻人の區別なしに、普遍的な博愛の觀念を理解せし  
め、且つ全人類にそれを適用しようとする努力した最初の西  
洋人である。彼は世界を調和し融合させる神の使命を自  
ら負うてゐることを自覺してゐたとなし、彼の融和の精  
神・和睦の精神について幾多の事例を擧げて立證してゐ  
る。<sup>③</sup>

このやうにして、最後に教授は結論に入る。佛教徒が

この地方に誕生した時、彼等は和親の王摩訶三摩多に關する世界時代初頭の原初の王權に關する古來の傳承とアレクサンドロス大王の平等主義との間に一つの接近を設けた。原初の王の神話的なイメージは外國の征服者によつて置かれた記憶と重なり合ひ、國民的な自尊心を害うことなしに、それを吸収してしまひ、そして遂に、ジェーラムに於けるマケドニア人の創立が、釋迦牟尼の前生と見做された摩訶三摩多に付與せられることになつたのであると結論するのである。

さて、ラモート教授の以上の研究に對して直に感じることは、佛教に關する傳説の古跡性を重んじて、それを學問の立場から正當に評價するといふ一つの方法を示されたことである。從來より經典や論書の中に含まれてゐるところの、到底事實とは信じられない幾多の傳説に對しては、それを信仰的な態度で其儘素直に受け取るか、さうでなければ、後人の假作に過ぎず學問的には價値のないものとして一笑に附するか、或は傳説として尊重したいが學問上からは説明に困ると云つたやうな、そのやうな受け取り方が多かつたのではないかと考へられる。この意味に於て、教授の宗教古俗學に關する深い理解と、その合理的な解釋法には學ぶべきものが多々あると

思ふのである。また、アレクサンドロスと摩訶三摩多との結び付きについては、恐らくこれ迄誰も取り擧げなかつた問題ではなからうか。筆者は寡聞にしてそのことを知らない。更に、この論文に於て、アレクサンドロスのヒューマニズムを強調した點が特に注目される。教授の筆致を見ると、佛教そのもののヒューマニズムについて殊更述べてはゐないが、文意に於ては、そのことが充分に述べられてゐることに氣が付くのである。その昔シルヴァン・レヴィ博士が「印度と世界」の中で、近くはルネ・グルッセ氏が「新ヒューマニズム」に於て取り上げた、その同じ問題が、ここでは西洋を代表するアレクサンドロス大王と東洋を代表する摩訶三摩多王——歴史的人物として應現したものとしては阿育王であるが——とを登場せしめることによつて、古代の世界に於て果した佛教の役割が、毘奈耶の經典と言ふ證據に基いて明かにせられたのである。そのことが、現在及び將來の佛教に對して如何なる意味をもつことになるかといふ點については、今は觸れる必要がない。吾々は教授の示唆を汲むのみである。併しながら、教授の論文を細部に互つて検討する時には、尙若干の問題が残されてゐるやうである。それは依用經典である毘奈耶藥事の構成と *Jitaka* や *Avan-*

dana との關連性の問題、それと共にこの經典に含まれてゐる大乘思想をあらはす幾多の事項、このやうな問題について教授は少しも觸れようとしてゐない。また、所謂佛陀の旅の第二のコースの同行者は第一第三の場合と異り、阿難が斥けられて金剛手藥叉 (Vajrapāni, yakṣa) となつてゐるが、これはいかなることを意味するのであらうか。これ迄に名前の知られてゐる佛弟子の中に金剛手と名づける弟子は見當らない。さうすると、これは婆羅門教で言ふ因陀羅 (Indra) 神の具象化なのであらうか。インドラは佛教に入りて帝釋と呼ばれ、外界の惡魔を破砕すると共に、身内の魔障をも調伏するものとせられる。そして、惡魔調伏のために金剛桿を所持するのである。彼が護法の役割を受け持つことについては、大乘の經典、例へば阿彌陀經に釋提桓因として登場することからも知られる。この帝釋天の金剛桿を把持して惡魔を制伏する力用が金剛手として獨立した形のもとに表はされ、祕密主金剛手として密教のシンボルとなることは、既に知られてゐる通りである。佛陀が第二のコース出發に際して、これからの北天竺の教化の旅は未開の地で非常に困難である。阿難では調伏事を成就し難いから金剛手を伴ふと云つて、彼を隨行者として旅を遂行する

といふ記述の仕方になつてゐる點は、その後この地方に密教が發展した事情とも考へ合はして色々の暗示を含んでゐるやうである。この點については教授は何らの關心も示さない。尙また、摩訶三摩多に關しては、まさしくその名を冠した法賢譯衆許摩訶帝經十三卷<sup>⑥</sup>がある。教授はこの經典のあることを知つて居り、その名を脚註に擧げてはゐるが、文獻としての價值其他、經の内容等については少しも觸れてゐない。これはいかなる理由によるのであらうか。以上のやうな問題は未だその他にもあるが、この論文に於て明かにしようとする主旨から見れば、問題とする程のものではないのかも知れない。

最後に、嘗つて山口博士が「最近十一年間のヨーロッパに於ける佛敎研究」(思想、一九五〇年、第七號)の中で、ギルギットの寫本のことゝ觸れて「漢譯やチベット譯にはあつても、梵本として得られない佛典がまだ多くあることであるから、ギルギットの研究は將來この方面に新たな光明を與へることであらう」と述べられたが、今回のラモート教授の研究は、早くもこの言葉を裏付けたのである。研究の意圖は少々異つたが、ピジルスキー氏が一九一四年に同じ文獻を用ひて、かの佛陀の旅を跡づけた。それから既に四十年近くの歲月が流れ

てゐる。この間には考古學・古字學・古錢學その他凡ゆる分野に於て著しい躍進を遂げた。今はまた、かの梵文寫本まで入手出來た。従つてラモート教授の研究がピジルスキー氏のそれに比べて格段の進歩をなしてゐることは改めて言ふ迄もない。左にその一、二の點を擧げて、この拙き紹介文を終ることにする。

ピジルスキー氏の研究に於ては、旅のコースに於ける各都城の地理的位置が明確にされてゐない。それは印度に於ける古代ルート概念が明かでないからである。ラモート教授の研究に於ては、フーシェ博士の優れた研究<sup>④</sup>に助けられて、古代ルートはもとより、各都城の位置を比定して、現在の地理學上の緯度までも表示してゐる。

また、ピジルスキー氏の研究に於ては、アレクサンドロスに關する研究がなされてゐない。ただ、藥事の記述に從つて摩訶三摩多王を古王聚落、賢馬聚落に關係せしめてゐるのみである。そして古王聚落の梵語も擧げてゐない。更に、ピジルスキー氏の研究に於ては、若干の地名に對する還元梵語の不明確なものがある。例へば、護積城に對してラモート教授は *Palitakota* とするが、氏は *Kuta-pala?* とするが如くである。

註① *Kujula Kadphises* の年代に關しては *Henri Deydier* :

*La date de Kaniska, JA. 1951, p. 137-9* に最近の學說を検討してゐる。

② cf. *Arthur Waley: The Real Tripitaka, London, 1952, p. 25.*

③ A) *mahata-janakayena sammataḥ.*

B) *arahati śīlīkṣetreṣu śālibhagam.*

C) *samyak rakṣati paripīḍeti mūdrnābhīṣikrah (Mahāvastu I, p. 348-9)*

④ *Opis* の叛亂平定の後、和陸の宴を行つた際、マケドニア人とヘルシア人との兩國家の間の共同の幸福と和親とを祈つたこと、また *Taxila, Poros, Abisares* を記つた後のこれら諸王に對する融合の政策 (*Verschmelzungs-politik*) をとつたことなどを擧げらる。

⑤ *ターラナータ印度佛敎史*、寺本和譯一八五頁、尙、*パトンの佛敎史*、大乘敎の結集の下 (原文第一〇一枚目) 參照。

⑥ 大正三、九三二、No. 191. 梵藏本缺。

⑦ (一)の註②、フーシェ博士のこの著作に對しては、*マエイ、ライエ* 氏の書評がある。 *H. Deydier: BEFEO, XLV, fasc. 2, 1952.*

(昭和二八、一一、一〇)